

〔研究ノート〕

## 螺旋のパンドラと括握的ひらけの希望

長谷川 博

### 目次

はじめに

- I 実用が息を吹き返すように、
- II 対パンドラにあるパラドクスをいかに開荒するのか
- III 制度は真理に近似すればそれで足りるのか
- IV 社会進化にとってタオは果たして非合理的なのか
- V 暗黙次元の解明はAI化されるだけなのか
- VI コミュニケーションのコミュニケーションはどこへ向かうのか
- VII として、いかなる保証が社会化しえるのか。

おわりに

引用参考文献

### はじめに

「商－経済－経営－政治（政策）－法律－文化－『形式／意味』情報」（順不同）のいずれかが他を先導し始めるかのように、優勢化はあるものだ。これは、たとえば戦略マーケティング登場の背景にもあったことだ。よって、日常化（個別日常化）や反日常化についての誤導もたらす問題に直面してきた。日常に徹し日常と反日常にある普遍と個別を隔てていては、いずれをも追究できず、「規範」が特別措置としてしか分からなくなる。ゆえに、「商マーケティング」などへの過去の社会的批判を漏らさず、かえって駆け出しの「教－『研（まずは卒論）／学』－問」から長期に亘り「経験／思弁」を積むことへのよろこびを、虚々実々はあるものだが専門的に覚えられるだろうか。

過去にキャンペーン化された「いい日旅立ち」のごとき別日常とは似つかない反日常のさなか、共著<sup>(1)</sup>での筆者の真意をその読者層（時空を揺がし動くターゲット）にさらに汲んでもらおうと並行執筆しだした面もあるのが、本稿である。これに対して、三十にして立つその読者が三十過ぎても、論語が唯一というわけではないが「論語読みの論語知らず」ならば、その立場から何というかは、かなり察しがつく。そこで、「守破離」（先行研究を取捨しつつ、その「頸木／足枷」を何ほどか離れること）を思う者へは、ミイラ取りがミイラになる負の螺旋へ下らぬ警戒に及くはなしと、各セクションの「――」以下をも伝えたい。

---

(1) 長谷川博ほか，2021年。

## I 実用が息を吹き返すように、

第1には3つある。①いかなる者でも、みずからがこれまでに最も慣れ親しんでいる考え方は、社会現象の科学的研究に適するよりもむしろ反するものなのかもしれないのだと、心にとどめられるかということ<sup>(2)</sup>。②社会現象に対する諸個人に均一化してはいないみずからの第一印象に用心しなかったばかりに、それが犯罪の容認を主張したものだとして、なんと非難されることもあるということ<sup>(3)</sup>。そして③逆に、皆が言っているからというもの、これまた嘆かわしいと非難される歴史があったこと。ついては、俗流の考え方だけでなく専門の考え方すらも危ういことがあり、洗練（ソフィスティケート）の域を超えようとされ、実用の可能性が問われた。100回で足りぬなら150回つけられれば嘘も本当になるという過去があったにせよ、つまるところ、根拠（原因、理由）の「真偽」の程に基づくのみである。

——そうではないからこそ、われわれの「身からでた錆」の全部未満を、つぎから立て直すことになる。①なんらかの変異的な事物の発生やその存在の保持について、事物間の結びつきに時空的なズレが少ないほどの「原因」と多いほどの「理由」そしてこれらに対応させて言う「結果」と「成果」を、真実と世俗の対立からであったにせよ、いつの間にか区分している場合が多いこと<sup>(4)</sup>。つまり、「理論と実践」における「基礎や応用」の実用でも、「因果や相関」における「決定と非決定」があり、「原因」と「理由」の区分ができる。「原因ではないことのすべてが理由にはある<sup>(5)</sup>」というのはい言いで妙であるが、非決定論的な「因果／相関」である縁起のなかにある根拠が理由だといっておく。②「科学－非科学」という対照から、現代理性批判が始まったということ。意思を「組織／システム化」に還元しだす主知論は、決定論に近づく一方で社会の離散を後景に招き、かたや非決定論を貫く主意論は、共同体（アセンブリッジなど）への収斂を後景に胚胎する。人間の完全合理性を前提とするモデル——「完全合理性モデルは行為が1回起性である場合に成立する<sup>(6)</sup>」との明示は高く評価されてきた——があつてこそ人間の制限合理性を否定する者はいないので、制限合理性を前提とするモデルが人間「理性」（神のみぞ知ることのバラボラアンテナ）を逆に開明してきた<sup>(7)</sup>。③研学における理解は、寛容原理2を要すること。たとえば、西洋による東洋の理解は、往々にして寛容原理1であった。東洋人がそれを鵜呑みにするのは、度が過ぎる他人任せであり、手放したことを手中に取り戻し考える他はない。「私たちが理解できるような仕方で彼らを最大限に理解せよ」というのが寛容原理1であり、「私たちとは全く異なる理解の様式が存在することを理解するようになれ」というのが寛容原理2である<sup>(8)</sup>。そして④「東は東、西は西」、「蛙の子は蛙」、「鳶

(2) コント／霧生和夫訳、1970（1822）年。

(3) E. デュルケム／菊谷和宏訳、2018（1895）年。

(4) 長谷川博、2020年a、45～69頁。

(5) Dretske, F., 1988.

(6) E. マランヴォー／林俊彦訳、1981年、7頁。

(7) I. カント／篠田英雄訳、1964年。I. カント／篠田英雄訳、1961年、1962年。I. カント／波多野精一ほか訳、1979年。

(8) H. ドレイファス・Ch. テイラー／村田純一監訳、2016年、174-189頁。

(鷹)が鷹(鳶)を生む、瓢箪(駒)から駒(瓢箪)、「他人の空似」という「同一／差異」(テセウス船)のパラドクスには、2次(DC)化<sup>(9)</sup>も踏まえたところの『人文－自然－社会科学』の螺旋もある学際——「コンステレーション」と呼ぶ(能記化する)ことにしている——が必要ということ。

というのも、人間は、より重要(意義あり)だとして選択した事物が、生活の中で演じる役割が決まるところの価値に向かう際に、つぎの①から③の基本的な「構え」において「生きた実用」を手中にすれば手放しもしており、そこで④が言われていたからである<sup>(10)</sup>。①「価値の本来の場／よいと評価されると思われるものすべて」を、自己の内部にあるものとしてみる「利己的構え」。②価値の本来の在りかを「関係ないし結合」の中の、先ず第1には自己と他の「事物／自己たち」との関連の中にもみる「関係的構え」<sup>(11)</sup>。③価値を独立した一領域として、もともと「われわれとかわれわれの関係の内部にあるもの」ではないとして位置づける「絶対的構え」。そして④上記①から③の「結合ないし統合的構え」。ノージックがここでいう価値とは、すでに、ある事物自体の価値や事実を目的的な価値や事実として求めるのか、それとも究極的に欲する事物のための手段的な価値や事実を求めるのかという提起<sup>(12)</sup>があったが、「内在(実体)－外在」／「目的－手段」における有機的統一としての実在である。

以上の理解が少なくともあって希求される社会進化では、上記④の再現化にもなる2次(DC)化が乏しいと、後述各セクションも含むさまざまな局面での稼働は以後(ポスト)を絶つ。たとえば、「選択する－選択しない」<sup>(13)</sup>／「規準－非規準」という局面の守破離においても、そうである。諸専門の進捗を踏まえた脱構築がないと、数理や弁証(正－反－合)の実効性がいつかは乏しくなる。そうはならないよい専門とは、「理論と実践」における「基礎や応用」の実用への「原因／理由」になる。ではあるが、基礎や応用というものには、単にお浸りするだけならば初学者ほどの誰もが、そのまま沈み込んでしまう底なし沼のようなところがある。

## Ⅱ 対パンドラにあるパラドクスをいかに開荒するのか

第2には5つある。①社会科学は、「神学－形而上学－実証主義」<sup>(14)</sup>／「人文－自然科学」における一帰結を言い換えるだけのアバター(分身)の身分から抜け出し合理性論に向ったということ<sup>(15)</sup>。とはいえ、社会科学的目的論(メレオロジー)／生物学的目的律(メログラフィ)において、これがなかなか一筋縄ではいかないことを進めているが、それ

(9) 長谷川博ほか、2021年。以上でいえば、第2章の図2-6における論理操作のこと。

(10) R. ノージック／井上章子訳、1993(1989)年、237～254頁。以上に基づく。

(11) Gergen, K. J., 2009. 以上は、関係中心主義である。問題は関係を結ぶという生成における発生の中身だが、以下のようなフロー(ゾーン)の現象学も重要。M. チクセントミハイ／今村浩明訳、1969年。

(12) M. ヴェーバー／祇園寺信彦・祇園寺則夫訳、1996(1904)年。

(13) C. R. Sunstein, 2015. 長谷川博、2017年、2020年a、2020年b。以上を参照されたい。

(14) コント／霧生和夫訳、1970(1822)年。なお、コントは実証主義の主観主義をいった。

(15) E. デュルケム／菊谷和宏訳、2018年(1895)。以上があってある以下に基づく。A. ギデンズ／松尾精文ほか訳、2000(1993)年。

は持続可能性 (sustainability) の核心に向かっているからだといってもいい。②完璧に「正しそう」に見える推論を用いても最終的に矛盾や明らかな誤りに突き当たるパラドクス<sup>(16)</sup>が、否応なく「社会的」事実として課される観察された現実「における事物」を避けようとするのは、学問の勇気や科学に対する信念を欠いた精神であるということ<sup>(17)</sup>。ただし、パラドクスの帰結である矛盾には、つぎの3つがある<sup>(18)</sup>。i) 論理的にすべてが演繹でできてしまうという破綻(「偽→真」)を必然的に来し不可能である矛盾。ii) 現実にはまずもって生じえないとはいえ純然に論理上のアポリアである矛盾。そしてiii) 数学など科学が進展するほどに上記2者だとはいえないと、その真偽への含意に諸論で濃淡がでていて、現実にその意味を語りうるので実践問題での多様な意義と結びついているところの不可能ではない矛盾。③詭弁家や天邪鬼といった揶揄にあたる訳語のなされることもあるソフィストとは、本来はただ「知のよく働く人」とか「知の働きをよくしてくれる人」という意味だったのであり、複数の常識にある対照や対立を明らかにするソフィストの精神が求められるということ<sup>(19)</sup>。④ともかく「主観的価値<sup>(20)</sup>」(加算的な効用価値説、非加算的な効用価値説)と「客観的価値」(労働価値説<sup>(21)</sup>)がいわれてきたということ。こういった価値論やⅢの自由論を心底から研学した者が、社会で揉まれるようになるまでにどれだけののだろうか。ところが、どれもありだと分かっても、「みんなちがって、みんないい」というような寛容による相対主義化を超えることに向かうということ。線引き(デマケーション)の閾値についていわれるのが、通常での寛容である。そして⑤上記の価値概念の残余である「主客未分的価値」(競争的使用価値説など)を考え進めるところにきた、といわれて久しいということ。ただし、これは、還元か創発かについて、西洋的思考にいつの間にか浸りきった者ほど尚更に、読み聞きすれど途端に伝わるものではない。

——専門に勤しむ上で、「語りえる事物—語りえぬ事物<sup>(22)</sup>」を塗り替えていくためにこそ、「メノンのパラドクス」を乗り越えるしかない。これは、「人間は、自分が知っているものも知らないものも探求できない—以下省略—<sup>(23)</sup>」というパラドクスのことである。ゆえに、「構造—現象—解釈」の3点動化へ責めて向かう、と言ってきている。しかしながら、パラドクスにも実にさまざまなものがあるため、上記②のiii)をすべて否定するのは短絡的である。

そこで、つぎから、「原因—理由」の場「所」における「自由—価値」/「還元—創発」を再考しなければ、コミュニケーションの送信者と受信者の双方に、文化へも浸潤する「ナラティブ(語り口調)/物語(神話、民話、下世話)」の迷宮で立ち往生が生じる。①「生産—流通—消費」の3点動化における「創造—適応」/「漸進—急進」/「破壊—生成(発生)」。②「寛容—非寛容」/「自由—不自由」/「用—無用」において、何をこそ禁欲し祝祭す

(16) M. カオンゾ/高橋昌一郎監訳/増田千苗訳、2019年。

(17) E. デュルケム/菊谷和宏訳、2018(1895)年。

(18) 長谷川博、2020年b。

(19) 田中美智太郎、1976(1941)年。以上に基づく。

(20) J. R. ヒックス/安井琢磨・熊谷尚夫訳、1995(1939)年。

(21) K. マルクス/マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳、1968(1867)年。

(22) L. ウイトゲンシュタイン/野矢茂樹訳、2003(1918)年。

(23) プラトン/藤沢令夫訳、1994年、45~46頁。

ればいいのかということ。パンドラの箱を「と（閉）ざし」てこそ残る希望というプロテスタンティズムの精神論の免罪符が駆逐してきたのは、非神学的な非寛容である。そして③自分の未来を知り現在の行為を選択せざるを得なくなるときに、決定論的な因果相関が邪魔になり自由意志は危機を迎えるというよりも、非決定論的な因果相関である縁起——「[全知?]への」忖度や、ナッジが内包されている——の方が、大きな問題になるということ。

### Ⅲ 制度は真理に近似すればそれで足りるのか

第3には2つある。①積極的自由については、異なる見解があったということ。フロムは、マルクスの唯物論的な経済学的接近<sup>(24)</sup>、これに対するウェバーの唯心論的接近<sup>(25)</sup>、そしてフロイトの心理学的接近<sup>(26)</sup>に対して、イデオロギーや文化は、一定の社会の存在様式によって形成される「社会的性格<sup>(27)</sup>」(特定社会の機能の実現に役立つように形成される精神エネルギーの特定構造)に根差すとした。その上で、フロムは、積極的自由にかかわり、「我々は、自由の増大過程が悪循環を形成せず、人が自由でありながら孤独ではなく、批判的でありながら懐疑に満たされず、独立でありながら他の人間や自然の一部として世界に統合されている<sup>(28)</sup>」といった。このフロムに反対してバーリンは、積極的自由とは「わたくしは他人ではなく、自分自身の意志行為の道具でありたいと願う<sup>(29)</sup>」ことであるといった。そもそも自我論の先駆者であるミードは、社会的自我とは、「内なる一般化された他者である客我と、それに反応し統一する取り扱うことができない固有としての主我という『自我の2重性』における創発的内省的自我<sup>(30)</sup>」であるといっていた。ただし、先のバーリンがいった「自分自身」とは、「固有としての主我」の捉え方がミードよりは流動的である。ゆえに、筆者は「ホロンークリナメンープラトー」の3点動化に言及したことがある<sup>(31)</sup>。そして②そもそもバーリンは「私が述べている自由は、行動それ自体というよりは行動のための機会である<sup>(32)</sup>」といい、後のセンが言い至ることを言っているということ。センが言い至ったこととは、「社会的取り決めにおける人の立場は、その人がどうにかこうにか達成したことにかかわる業績、われわれが行う価値があると認めることを達成するための実在的（恒常的）な機会がどれだけ与えられているかと比較しての自由、という2視点から判断されうる。両者は必ずしも一致するわけではない<sup>(33)</sup>」ということである。

(24) K. マルクス／マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳、1968（1867）年。

(25) M. ヴェーバー／祇園寺信彦・祇園寺則夫訳、1996（1904）。

(26) S. フロイト／懸田克躬訳、1973（1917）年。

(27) Fromm, E., 1941, p. 210-211, 275-2296.

(28) Fromm, E., 1941, p. 256.

(29) I. バーリン／小川晃一ほか訳、1971（1969）年、319頁。

(30) G. H. ミード／船津衛・徳川直人編訳、1991年。

(31) 長谷川博、2014年。

(32) I. バーリン／小川晃一ほか訳、1971（1969）年、63頁。

(33) Sen, A.K., 1992, p.31.

——以上のことは、入門や標準の基礎には収まらない大家の諸論である。そこで、つまりは少なくとも、「行為それ自体-行為のための機会」/「～から～へ」にある自由の違いが学習されていないと、特定の概念フィルター（色眼鏡）で濾過した関係しかわからなくなる。であるから、そうなると行為変容といえる研学にはならなくなっていき、既存の制度にすらある個人を道具化し支配する「意図せざる」不完備性を探る上での、ビジネス的にもよくいわれる全体最適と部分最適の無限対立という思い込みや、さらには後述する孔子と老子の対話から得られることも、見えてくるわけがない。

ところで、従属変数である関係を独立変数であるかのように言うことを、関係の物象化（より強い意味での「コトのモノ化」）という。こういうことも考えるならば、つぎのことは重要である。既述の結果（成果）を産物とする関係の方程式における説明変数と披説明変数が“t”（媒介変数）でつながっているならば、つながっていなければ躊躇なく従属変数と独立変数とっていいが、限定的期間におけるそのtは根強い原因（理由）である。しかしながら、組織やシステムの「もたらす」変化が、個人主義がファーストとなっていく個への還元的なミクロ分析的方法では説明できない場合がある。そうとはいいい、tを消去しながら関係を階層的に上げつつ個々を集計するところのマクロ分析的方法に代え、「幹としては自己免疫性／実存としては社会耐性」のように分岐した自己組織性論<sup>(34)</sup>と、後述する包披論でいう螺旋における創発、そしての進化の解明を要することもある。定義はいろいろあるが、個別的な人間が中心にあるという考え方になることを避けるために人間を「現存在」といい、現存在が何らかの仕方で現存在の活動への態度をとることができ、つねに何らかの仕方でそれへと態度をとっているその存在を「実存」という<sup>(35)</sup>。

そこで、社会的真理はどこにもないと吐露する社会科学はお仕舞いだが、つぎからコンセプト化を考えることになる。①制度は真理の近似値であるという真理制度論が、どうもプロパガンダの具になっていやしまいか。②それどころか、規範というにはおこがましい制度が、定言や仮言にせよ命法を翳してはいまいか。よって、至難なことだが、「正義とはわれわれの振る舞いの細目を導く厳密なルールを適切に付与しうる唯一の徳である<sup>(36)</sup>」といわれたことを、まずは重く受け止めることになる。

そして、会社（法人格のある企業）はむろん集合体によって制定されたあらゆる信念や行為様式に先行する制度にしても、その行為に後行する制度にしても、それが良かろうと悪かろうと、行為を促進・構成する面と行為を制約・拘束する面がある<sup>(37)</sup>。会社動機において、「やり（やってみ）なはれ」、「やりなさんな」といわれることを、熟練するほどのスキル（技能）で済ませば、果たしてそれでいいのか。「製品-『組織／システム』革新」における駆動力は、Iで述べた構え④から身をもって行為する駆動力である。

(34) 長谷川博，2013年。以上の図1を参照されたい。

(35) H. L. ドレイファス／門脇俊介監訳・榊原哲也ほか訳，2000年。以上のハイデガー解釈に基づく。

(36) A. スミス／高哲夫訳，2013年，608頁。

(37) 長谷川博，2020年b。図3を参照されたい。

#### Ⅳ 社会進化にとってタオは果たして非合理的なのか

第4には3つある。①すでに常識になっていた進化の観念に、スペンサー<sup>(38)</sup>は広範な適応範囲を与え、ダーウィン<sup>(39)</sup>をその科学的保証にしたとされているが、こうした進化論の影響は日本社会においては、明治10年代以降には大だったということ<sup>(40)</sup>。ところが、②2次(DC)化してみれば、いかにも西洋思考的な実用に顕著な分岐する道とは別に、東洋的思考には、なにかを「選択するもしないもない」という「分岐なき<sup>(41)</sup>、恒常<sup>(42)</sup>、自然<sup>(43)</sup>の道(タオ)」もあるということ。いまの科学による保証は、すでに選択を保証するばかりではない。そして③個人間の同質性が欠如していることにより禁欲制がないとすれば、このことは社会化とは相容れないとされたこと<sup>(44)</sup>。だからこそ、異文化間インタフェイスをいうにおいては、グローバル化上で「飛んで火に入る」のか「火のないところに火種を入れる」のかが再照射された。そこにあった懸念も、サプライチェーン問題に波及し幾度か再現されている。

——戦後ともなれば先の進化論の影響が増し、系統樹的に分岐する道に鋭敏な方がいいということが優勢に前面化し、タオのことは背面化してきた。この趨勢の中で、本書を携えるまでの読者といえども、いずれを選択するかとそれは考えてきたであろう実用的な「分岐する道」についてのやがては良くも悪くも廃れてしまうナラティブで変わる物語<sup>(45)</sup>を、読み聞かされてきた面はあるだろう。道には、すでに出来上がっていて与えられるものもあれば、そのうちには通れなくなる道もあり、自分でつくっていくしかない道もある。分岐する道だけが選択肢だと思ふことは、さらさらない。脱構築できないままにこの分岐するいずれかの道で100点を取ろうとしつづけるほど、タオで60点以上へと積み上げることは逆にできなくなっていくということが、「不幸」のはじまりになる場合が、皆にありうるからである。ということについては、後述する「合理的な愚者」頼みになってしまっている幸福追求の限界(すがってもある「合理性の罠」)が言わずと知れており、後述する「CC」による声が上がらないからだ、とはいいつづける。

ビジネス[の業際]において大企業に限られないが経営的自立性の疑わしいゾンビ企業<sup>(46)</sup>が残りつづけ、新たな起業神話の主だと評価の高いユニコーン企業がなかなか生まれてこなかったという比較劣位に、日本が陥ったのは何故なのか<sup>(47)</sup>。今様にいえば、コミュニケーション・メッセージの送り手と受け手の双方に、学習回路を開く状態がないからな

(38) H. スペンサー／清水禮子、1970(1857)年。

(39) C. ダーウィン／八杉龍一訳、1990(1859)年。

(40) 清水幾太郎、1970年。

(41) 孔子／金谷治訳注、1963年、28頁。以上には選択という概念自体がないと以下がいう。Fingarette, H., 1972.

(42) 老子／蜂屋邦夫訳注、2008年、11-12頁、202~205頁。

(43) 莊子／金谷治訳注、1975年(第二冊、外篇)。145~177頁。なお、「在宥」(同書61頁)というのは、自由放任と同じである。

(44) E. デュルケム／菊谷和宏訳、2018年(1895)。

(45) 橋本陽介、2017年。以上は分りやすい。ついでに以下も参照されたい。長谷川博、2020年a。

(46) D. チャーマーズ／林一訳、2001年、128~135頁。以上がいうゾンビの意味に照らせば、それは経営的自立性を求めるのが無理だと分るだろう。

(47) 森嶋通夫、2004年、2010年。以上の資本主義論も参看されたい。

のか。というのは、人生の脈絡や複雑さを凌駕する普遍的定言的な倫理／道徳の枠組としてのカント流の強い規範ではなく状況倫理的な唯一の規範である「仁」と、たとえば祀るときには霊が眼前にいる〈かのように〉を本気とする「礼」とは<sup>(48)</sup>、包摂論的に循環しているといえるからだ。ゆえに、孔子は、仁を定義しようとしなかったのではあるまいか。

そして、仁を「用」とする孔子と、仁を「無用」とする老子の問答があったとされている<sup>(49)</sup>。また、左右、上下、男女といったさまざまな2項対照区分（バイナリー・コード）のどちらか一方を尊ぶという差別的な見方の強調は、たとえそれが真実（自然）と世俗（自然に近似する「第2の自然」<sup>(50)</sup>）との対立であったにせよ賛成しないとして「万物斉同」、今様に言えば「自然の斉一性」をいう荘子がいた<sup>(51)</sup>。しかも、用か無用だけではなく「無用の用」<sup>(52)</sup>か「用の無用」かについても、「タオにおける序列」<sup>(53)</sup>があるので、紀元後になってすら長らく考正を要してきた。

無用の用とは、進む方の道を取るという意味の「正」選択、進まない方の道は捨てるという意味の「負」選択といった取捨選択をすぐさま決められずに、あたかも押し入れにしま込んでおくようにしている「タオの序列上での中立選択子」である。具体的には、足下の地面に対する非足下の地面、容器の空洞、マーケティングで言えば容器や包装やチラシ等の印刷表示の余白などである。ゾンビ企業は、無用の用なのか用の無用なのか。そして、タオにおける序列とは、今様に言えば、地平や地表さらには宇宙を構成する根本実体といえる目に見えないほど大きな逆には小さな組織やシステムの階層性のことである。この地球上に限定されるが、観念論寄りの地平に対して地表とは、絶えず新しい環境や新しい生物をつくりだしている調節された生態系よりも広い概念である<sup>(54)</sup>。

その途上にあることだが、つぎのVの④にかかわる科学と哲学の対話といえるような、階型化——矛盾が生じないように階層化するが、その階層化が無限後退し計算量爆発を起こす。たとえばマルチバース論——と2次（DC）化の対照には出くわす。それでも進化論の近年までのさらなる進捗<sup>(55)</sup>や、「大と小が互いを兼ねる」〈かのように〉の相対論と量子論との統合化は、以上の意義を目下は紛れもなく保証している。「推論のための前提の発見（アブダクション）」に直観はつきものだが、ここもいうのがこれからのテキストにおいても使命であるとは、静かに直観している。

(48) M. ピュエット・C. グロス＝ロー／熊谷淳子訳、2018年、42～78頁。以上では、仁は、きみのもつ状況を読む力、大局をつかむ力、友人をこの特定の時点へと導いたすべての複雑な要素を理解する力となる。パターン化された行動や機械的な習癖はむしろ妨げとなり、礼とは違うという。

(49) 荘子／金谷治訳注、1975年（第二冊、外篇）、167～168、204～217頁。以上に基づく。

(50) C. ヘルマン＝ピラート・I. ホルディレフ／岡本裕一朗・瀧澤弘樹訳、2017年。

(51) 荘子／金谷治訳注、1971年（第一冊、内篇）、40～89頁。以上に基づく。

(52) 老子／峰屋邦夫訳注、2008年、50～51頁。

(53) 荘子／金谷治訳注、1971年（第一冊、内篇）、136-139頁。

(54) L. マーギュリス／中村桂子訳、2000（1999）年。

(55) 長谷川博、2013年。41～61頁。



## V 暗黙次元の解明は AI 化されるだけなのか

第5には4つある。①創発性論の始祖の一人とされているポラニー<sup>(56)</sup>は、「知」(knowledge)を得る「身／脳」の働きである「『知る』(knowing)という過程の暗黙次元」をいったということ。神秘主義化批判の洗礼を受けてきた創発性論<sup>(57)</sup>は、その批判を逆に洗礼しはじめている。おなじことで、ロマン主義が謳歌する感情をすべからず非合理的なものだと決めつける批判を逆批判し、ロマン主義の可能性を再開することにもなるといえるのが感情合理性論である<sup>(58)</sup>。そして②世で実用的に「寄り添い」が言われているのは、詐欺商法の「添い寝」と混同されては甚だ困るが、日本の徒弟制度にもあった「住み込み」ないし「安住」(dwelling)に比べれば距離感があるとしても、「教え[られ]はしないが、盗めるものなら盗め」という機会にある創発を「括握」(包括的理解・「理解の理解」・コンプリヘンション)する必要があるということ。③子供が自転車に乗れるようになるには何度か転ぶのも仕方ないとする練習過程での暗黙次元に比べれば、つぎの過程での暗黙次元はより合理的だということ。まずは補助輪をつけて乗らせ、何日か様子を見ていって親がそろそろいいかと思ったならば、つぎにはその片輪だけつけ残して乗らせ、さらにもう大丈夫かと思った時には、その片輪を外しても子供は一度も転ばずに乗れるようになっていくという過程である。これは、すべての理由を原因化できるとする「合理的な患者<sup>(59)</sup>」に対照できる「合理的な神秘主義<sup>(60)</sup>」の例化になる。そして④実上記③のようなことがあるので、過程の暗黙次元についてといえども、後述するが1元か2元か多元かといわれる「有なる有」である存在(モノなど)に対して、物理学が探求する「3つの無」に対応していれば、社会科学の盲点を突く科学だということ。つまり、「無なる無」である「数としての0である無」と「時空さえない究極の無」、そして「有(無)なる無(有)」である「空という無」。

——であるから、理論と実践における「基礎や応用」の生きた実用といえる実装(インプリメンテーション)は、「ドーナツの穴だけ残して食べる<sup>(61)</sup>」という無理なことや欺瞞<sup>(62)</sup>に何やら血道をあげる不自然な人為的実装ではなく、「形式論理(FOL)／非形式論理(SOL)」の穴も食べるという実装になる。非形式論理とは、言葉の背後に実体を見ようとせずに1がない空論ではなく、既述の盲点を突く科学といえる0元論やメビウス輪をいうような表裏一体論を含む1.5元論のことである。

1.5元論としては、西洋等の物理学との前後関係をここで突き止めようとはしないが、「1なる多、多なる1<sup>(63)</sup>」が日本ではいわれていた。しかしながら、ここにある包披論を物理

(56) M. ポラニー／高橋勇夫訳, 2003年。

(57) M. ポラニー／長尾史郎訳, 1986(1958)年。

(58) R. H. フランク／山岸俊男監訳, 1995年。まずは、以上から考え進めるといいだろう。

(59) Sen, A., 1982.

(60) 安富歩, 2013年。以上でいう「神秘的な合理主義者」は「合理的な患者」と同じ。

(61) 大阪大学ショセキカプロジェクト, 2019年。

(62) D. グレーバー／酒井隆史ほか訳, 2020年。以上はブルシット・ジョブと呼んだ労働を批判する。マイクロ(マクロ)では動いているようでもマクロ(ミクロ)では止まっているような状態／状況を思わせる。

(63) 西田幾太郎著／上田閑照監修／大橋良介・野家啓一編集, 1998年。

的にも分っていないから、VIで再論するホーリズムと相対主義の混同が生じて蔓延し、ホーリズムの貶価につながった経緯がある。くれぐれもいうが、相対主義には包摂論はない。「何でもあり」だとは言っても、包摂論と相対主義とではその訳がちがう。1がないところで単に自由置換をいっても、それは相対主義である。こういうことが分れば、「独裁なる民主、民主なる独裁」ということも、それぞれの専門において考えられるようになるはずだろう。なお、「2元」論と訳されてきたデュアリズムが、「2重性」論と訳されているときには、2次(DC)化したことによる1.5元論に立ち入っているのに要注意である。たとえば、短期と長期のデュアル戦略<sup>(64)</sup>というときの「デュアル」は1.5元論になっていた。その上で、これからの実用へできるだけ速く標準化されるよう、今は先進基礎のように映ったとしても、つぎの研学があることを、ここに示しておく<sup>(65)</sup>。というのは、これらをカオスの縁で同時前面化し、その行使を抑制する事実要因への非寛容——神学的な非寛容ではない——を断固として貫くことになるからである。①示唆豊かな諸論がある平均化ではなく最大化により「自ずから然る」という創発現象。②進化論における正負選択論には残余があるという「粗」中立選択論。③能動態(マーケターの在り様)や受動態(消費者の在り様)は破れだとするに足る究極の理由論といえる中動態論、そして④共同体論にある「ALT-非ALT」の脱構築的再考といえる発生的共生論。

## VI コミュニケーションのコミュニケーションはどこへ向かうのか

第6には4つある。①単純化を習い性とする常識にとっては、存在の同一性に対する差異性の発生(生成)が忌(厭)わしいとされる変異にも、何らかの有益な存在原因と存在理由がありうるということ<sup>(66)</sup>。②さまざまに発生した諸変異の全体における構成比(シェア)が、統計的にも頻度として言われだし、その頻度が最も高い最頻値(モード)は、環境への適応度が高いとみなされているということ。ただし③事物間や集計レベルが異なる集合間の相互作用上の結びつきには時空的なズレがあり、そのズレの程度から、「同時間性(互いにいつも引きずり抱えていること)／同空間性(互いの場所のこと)」や「異時間性／異空間性」が言われだすということ。そして④宗教化後をまっさらにして知をいおうとする科学は、19世紀になれば圧倒的威力を発揮し出した「技術」を経て、20世紀にもなれば「商-経済-経営-政治(政策)-法律-文化-『形式/意味』情報」における「技能」(スキル)にも及ぶことを経た。しかしながら、科学と哲学は、互いの知の身分を、以前のように分け隔てただけに済んではない。

——物理学では既に、「物質やそのエネルギー-情報(物質やエネルギーのパターン)」の関係性を解く<かのように>、反物質などが言及されている。こうして、「アトミズム-ホーリズム」という「生」の中の螺旋の全包括的なひ(開)らけを、まさしく考えているHI同志が、「人為-自然」についての超越論的な対話を、ますます深く繰り広げている。ゆえに、ここまでここを過ぎれば世迷言だと蓋をせず、果たしてどういう帰結がでるか

(64) Abell, D. F., 1993.

(65) 長谷川博, 2013年, 2020年 a。

(66) E. デュルケム/菊谷和宏訳, 2018年(1895)。以上に基づくが変更している。

いう研学の余地がある。よって、社会科学は、今後ますます「自然にある物理法則」に反する前提を置くことはできない。

社会科学的に言えば、アトミズムとは個人主義のことになる。かたや、ホーリズムとは、なんらか排除ありの全部、あるいは「こうする（なった）」ことが全部だという全体主義ではなく、個人主義と対立しない「何でもあり」の全部をいう包披論のことである。ついては、自然科学では考える必要がないとされてきた「自由－価値」／「還元－創発」を、この地上の相互作用関係についてどう考えるかになる。そして、「有機体論的な組織／機械論的なシステム化」におけるメカニズム（被付加的原理）や法則（恒久原理）が追究される。

こうして、AI(人工知能)ですら複雑計算系で計算量が爆発し身動き取れなくなる事態を考え進めるのはHI(人間知能)でしかなく、「失われた20～30年」後の21世紀に他人事であるわけがない。エポックメイキングな事態であるほど、「形式／意味」情報についてのメッセージが渦巻く<sup>(67)</sup>。本稿執筆のタイミングでは、失われた云10年に区切りをつけるほどに唯物的事実だとの誇張が新型コロナ・ウイルス感染症（COVID-19）についてありはしないかと、SNSやマスコミで大なり小なり問答がある。

なお、共著で提示した言語学由来の構造論だけでなく、進化論、生物学的決定論、西欧合理主義の行き過ぎと戦う民俗学由来の構造論<sup>(68)</sup>の視点も重要である。レヴィ＝ストロースは、構造とは要素と要素間の関係とからなる全体であり、この関係は一連の変形過程を通じて不変の特性を保持するが、体系には変形がなく——機械論的システムにオート（自給）はないという意味であろう——、手が加わるとばらばらになり崩壊してしまう<sup>(69)</sup>、と言っていた。

「対称－非対称型」というコミュニケーションの区分とは別に、これらをこえて、「コミュニケーションのコミュニケーション」<sup>(70)</sup>——階型論的メタというよりは2次（DC）化論的メタにおける括握的コミュニケーション——が、現実には、メッセージの送信者と受信者の間で展開されてきている。このことに創造的に適応するビジネスを例化した、プロダクトブランド・コミュニケーションの二番刈り以上というコーポレートブランド・コミュニケーション論もあった。

既述のノージックの価値論や2大価値説等を踏まえると、そこには「内在－外在」／「目的－手段」の「対称性と非対称性（対称性の破れ）」という「螺旋の包披に担架された自由」がみえてくる。その上で、マーケティング取引を考える際に新たな事実付加が「三方よし<sup>(71)</sup>」となるよう結合ないし統合化されていくかのように、異なる状況でいずれかの中にすっかり没頭してしまうことができる「構造－現象－解釈」なのだが、それらの2次（DC）化にある3点動化が生じていると、「生産－流通－消費」についてより意識して

(67) 上田皖亮ほか、1999年、61～110頁。以上を参看されたい。

(68) C. レヴィ＝ストロース／荒川幾男ほか共著、1972（1958）年。言語と文化の関係が問題となる3つのレベルに言及している。

(69) C. レヴィ＝ストロース／大橋保夫編、1979年。

(70) 長谷川博、2021年予定。

(71) 大野正英、2011年、2～4頁。2012年、241～253頁。

いくことになる。

## Ⅶ として、いかなる保証が社会化しえるのか。

そして第7には4つある。①基礎が終わりなき問いであると同時に答えともなるのは、[社会]科学のうちのひとつの専門としての主張の固有性を支えていると見做されるからだということ。むしろ、理論と実践が問いと答えを提供し合うということを経ても、実用上の誤導になりかねない不透明性がゼロになるとは言い切れない。②ミクロ還元だろうとマクロ還元だろうと、この世界は一体いくつの「元」から成り立っているのかが、還元主義的に解明されようとしてきたこと。「元」というのは、他の区分と重なりがない区分を意味する「カテゴリー」や、他の何ものによっても説明され得ない存在を意味する「実体」のことである。紛らわしいだろうが、実在とは、存在の変化しない一部または全部のことである。そこで、「他によって説明される－されない」/「変化する－しない」において、さまざまな存在が考えられる。③「動学」(各数量が、日付けをもたねばならないような部分)、この特殊動学である時間を通じて不変な「静態」、そして「静学」(日付けについてのいかなる暗示をも慎むような部分)という区分において、静態で確立される価格体系は、静学的価格体系と実質的には全く同一であるということ<sup>(72)</sup>。そして④現実の世界における決定系(確定系・規則的現象・コスモスの現象)と非決定系(確率論的系・不規則的現象・ランダム現象)について信じられてきたところの、いずれの系も交じり合うことはないという「乖離概念」の追従にはならない、非線形の決定論的システムあるいは非決定論的システムに生じるカオス(揺動現象)が、すでに見いだされていたということ<sup>(73)</sup>。

——問答において重要なことは、果たしていずれに、より無理がありより大きな穴が残るのかということである。それにしても、諸科学の諸専門間では、相互にとってなかなか伝わりきらないことが、残念ながら少なくはない。また、2次(DC)化の論理でうまく現実に反応できない歯痒さもあった。

西洋思考的な1元論、2元論、多元論に発するところの基礎と応用だけでなく、むしろ東洋思考の再現になる0元論や1.5元論に発するところのより自然な希望がひらけていく基礎と応用もますますいう。[螺旋のある]基礎は、「基礎づける能動態－基礎づけられる受動態」の間にあり、我々を突き動かすさまざまな「自由－価値」/「必然－偶然の事実」を前提にした、「還元－創発」という綱の引き合いだけではなく、それらを包摂する螺旋の中の開閉(「内部と外部」の境界化における「依存と独立」の関係)についてのメカニズムや法則に向かう「終わりなき問い(課題)」として定立化されるのだ<sup>(74)</sup>。

忌(厭)わしがられてきた節もあるそうだが、物理におけるの乖離概念自体が危ういというのは、2元論に陥る温床だからだと社会科学的には重要である。「人為/自然」にある根元の世界と破れた世界の乖離概念に取り込まれず、最終意思決定に至る過程が、「実用のための基礎が乏しく実用のための応用が利かないという現代の小田原評定」、よって

(72) J. R. ヒックス/安井琢磨・熊谷尚夫訳、1995(1939)年、205～231頁。

(73) 上田皖亮ほか、1999年、3～59頁。

(74) 長谷川博、2019年、31頁。以上に加筆。

「実用上の後退といわざるをえない結果がみえた後での現代の雨乞い」となることを避けるため、こうした現実にも接触してきた者たちから、CC論的な声が創発的に上がってくる条件を知らないことによる制限合理性に抗する先進基礎もいっておいた。乖離概念批判が妥当な限り、線形化を十全化するにはなおさらのこととしても、社会進化におけるCC化の「保証」になると考えられる。マーケティングで言えば、「垂直的価格[管理]体系における利益配分という補償のための中間組織化ないし企業グループ化という保障<sup>(75)</sup>、そしてその保障のためのパートナーシップ化<sup>(76)</sup>という保証」でいうところの「保証」になる。パートナーシップ概念も、「リーダーシップ-フォロワーシップ」の2次(DC)化がないほど、訝しがられてきたのではあった。

## おわりに

またや共著等を認めた折には、以下をさらに伝えていきたいところである。①Iの結合ないし統合的構え(Ⅱの主客未分的価値)。②Ⅲの「自由-価値」/「還元-創発」の再考が繰り返される「原因-理由」の場[所]における規範の追究による制度化。③Ⅳで前言を述べるに止めたが、「資本主義と市場経済」の混同への懐疑としてニューカム・パラドクス<sup>(77)</sup>が言われたことや、資源資本主義。寛容論2の西洋人も言うようになっている縁起。④Ⅴでいう西洋思考的区分の壊発といえる4つの知。⑤Ⅵで「現象論的な実存-構造論的な幹」を踏まえると言ってきたコミュニケーション・モデルの構築は、それはAIのHI化の足しにはなるが、<HI化>の社会化の足しに必ずやなるのか。

それまでに筆者は、螺旋のパンドラに対する括握的ひらけの希望が叶うよう<sup>(78)</sup>、特にⅦを掘り下げつつ次稿<sup>(79)</sup>に取り組む。入門から標準そして先進に至るとパンドラの箱が開きそうだと回避する「教-研学」は全包括的ひらけの希望がある専門を問うてはいない、ということに誰も忸怩たる思いが消えるものではないだろう。

## 〔引用参考文献〕

- Abell, D. F., 1993, *Managing with Dual Strategies*, The Free Press. (小林一・二瓶喜博訳, 1995年, 『デュアル・ストラテジー』, 白桃書房)
- Dretske, F., 1988. *Explaining Behavior: Reasons in a World of Causes*. Massachusetts Institute of Technology. (F. ドレットスキ/水本正晴訳, 2005年, 『行動を説明する: 因果の世界における理由』, 勁草書房)
- Drucker, P. F., 1973, *Management: Tasks, Responsibilities, Practices*, Harper Business.

(75) 長谷川博, 1996年, 45~55頁。

(76) 長谷川博, 2009年, 65~91頁。

(77) なお, ニューカム・パラドクスそのものについては, ノージックとマーティンの見解を対比する以下が分かり易い。W. バウンドストーン/松浦俊輔訳, 2004年, 349~383頁。

(78) B. ラトゥール/川崎勝・平川秀幸訳, 2007年。以上も参看されたい。

(79) 長谷川博, 2021年予定。

- Drucker, P. F. with Joseph A. Maciariello, 2008, *Management*, Revised ed., Collins Business.
- Fingarette, H., 1972, *Confucius: the Secular as Sacred*, Harper & Row.
- Fromm, E., 1941, *Escape from Freedom*, Henry Holt and Company. (E. フロム／日高六郎 訳, 1965年, 『自由からの逃走』, 東京創元社)
- Gergen, K. J., 2009, *Relational Being: Beyond Self and Community*, Oxford University Press.
- Martin, G., 1974, "Mathematical Games," *Scientific America*. March.
- Nozick, R., 1969, "Newcomb's Problem and Two Principles of Choice", in R. Nicholas, ed., *Essays in Honor of Carl G Hempel*, Springer.
- Sen, A., 1982, *Rational Fools: Choice, Welfare, and Measurement*, Basil Blackwell Publisher. (大庭健, 川本隆史訳, 1989年, 『合理的な愚か者：経済学＝論理学的研究』, 勁草書房)
- Sen, A., 1985, *Commodities and Capabilities*, Oxford University Press. (A. セン／鈴木興太郎訳, 1988年, 『福祉の経済学：財と潜在能力』, 岩波書店)
- Sen, A.K., 1992, *Inequality Reexamined*, Russell Sage Foundation. (A. セン／池本幸生ほか訳, 1999年, 『不平等の再検討：潜在能力と自由』, 岩波書店)
- Sunstein, C. R., 2015, *Choosing Not to Choose: Understanding the Value of Choice*, Oxford University Press.
- A. スミス／高哲夫訳, 2013年, 『道徳感情論』, 講談社。
- A. ギデンズ／松尾精文ほか訳, 2000 (1993)年, 『社会学の新しい方法規準：理解社会学の共感的批判』, 而立書房。
- A. コント／霧生和夫訳, 1970 (1822)年, 「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」, 「実証精神論」, 『世界の名著 36 コント スペンサー』, 中央公論社。47～139, 141～233頁。
- A. N. ホワイトヘッド・B. ラッセル／岡本賢吾ほか訳, 1988年, 『プリンキピア・マテマティカ序論』哲学書房。
- B. ラッセル／高村夏輝訳, 2007年, 『論理的原子論の哲学』筑摩書房。
- B. ラトゥール／川崎勝・平川秀幸訳, 2007年, 『科学論の实在：パンドラの希望』, 産業図書。
- C. ダーウィン／八杉龍一訳, 1990 (1859)年, 『種の起原 (上下)』, 岩波書店。
- C. ヘルマン＝ピラート・I. ボルディレフ／岡本裕一郎・瀧澤弘樹訳, 2017年, 『現代経済学のヘーゲルの転回』, NTT出版。
- C. レヴィ＝ストロース／荒川幾男ほか共著, 1972 (1958)年, 『構造人類学』, みすず書房。
- C. レヴィ＝ストロース／大橋保夫編, 1979年, 『構造・神話・労働』, みすず書房。
- D. グレーバー／酒井隆史ほか訳, 2020年, 『ブルシット・ジョブ：クソどうでもいい仕事の理論』, 岩波書店。
- D. チャーマーズ／林一訳, 2001年, 『意識する心：脳と精神の根本理論を求めて』, 白揚社。
- E. デュルケム／菊谷和宏訳, 2018年 (1895), 『社会学的方法の基準』, 講談社。
- E. マランヴォー／林俊彦訳, 1981年, 『ミクロ経済理論講義』, 創文社。
- F. ブロデル／金塚貞文訳, 2009年, 『歴史入門』, 中央公論新社。

- G. ベイトソン／佐藤良明訳，2000年，『精神の生態学』新思索社。
- G. ベイトソン著／佐藤良明訳，2006年，『精神と自然：生きた世界の認識論』，新思索社。
- G. H. ミード／船津衛・徳川直人編訳，1991年，『社会的自我』，恒星社厚生閣。
- H. L. ドレイファス／門脇俊介監訳・榊原哲也ほか訳，2000年，『世界内存在：「存在と時間」における日常性の解釈学』，産業図書。
- H. スペンサー／清水禮子，1970（1857），「科学の起源」，「進歩について：その法則と原因」，『世界の名著 36 コント スペンサー』，中央公論社，335～396，397～442頁。
- I. カント／篠田英雄訳，1964年，『判断力批判（上下）』，岩波書店。
- I. カント／篠田英雄訳，1961年，1962年，『純粹理性批判（上中下）』，岩波書店。
- I. カント／波多野精一ほか訳，1979年，『実践理性批判』，岩波書店。
- I. バーリン／小川晃一ほか訳，1971年，『自由の論理』，みすず書房。
- J. バロウ／松浦俊輔訳，2000年，『科学にわからないことがある理由』，青土社。
- J. R. ヒックス／安井琢磨・熊谷尚夫訳，1995（1939）年，『価値と資本：経済理論の若干の基本原理解に関する研究』（上），岩波書店。
- J. P. デュピュイ／森元庸介訳，2013（2012）年，『経済の未来：世界をその幻惑からとくために』，以文社。
- K. マルクス／マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳，1968年，『資本論 第1巻』，大月書店。
- L. ウイトゲンシュタイン／野矢茂樹訳，2003（1918）年，『論理哲学論考』岩波書店。
- L. マーギュリス／中村桂子訳，2000年，『共生生命体の30億年』，草思社。
- M. ヴェーバー／祇園寺信彦・祇園寺則夫訳，1996（1904），『社会科学の方法』，講談社。
- M. エンデ／田村都志夫訳，2007年，『自由の牢獄』，岩波書店。
- M. カオンゾ／高橋昌一郎監訳／増田千苗訳，2019年，『PARADOX MARGARET CUONZO パラドクス』，ニュートンプレス。
- M. チクセントミハイ／今村浩明訳，1969年，『フロー体験 喜びの現象学』，世界思想社。
- M. ピュエット・C. グロス＝ロー／熊谷淳子訳，2018年，『ハーバードの人生が変わる東洋哲学：悩めるエリートを熱狂させた超人気講義』，早川書房。
- M. フリードマン／佐藤隆三・長谷川啓之訳，1977年，『実証主義経済学の方法と展開』，富士書房。
- M. ポラニー／長尾史郎訳，1986（1958）年，『個人的知識：脱批判哲学を目指して』，ハーベスト社。
- M. ポラニー／高橋勇夫訳，2003年，『暗黙知の次元』，筑摩書房。
- M. ポラニー／吉沢英成ほか訳，1975（1957）年，『大転換：市場社会の形成と崩壊』，筑摩書房。
- R. ノージック／井上章子訳，1993年，『生のなかの螺旋』，青土社。
- R. H. フランク／山岸俊男監訳，1995年，『オデッセウスの鎖：適応プログラムとしての感情』，サイエンス社。
- S. フロイト／懸田克躬訳，1973（1917）年，『精神分析学入門』，中央公論新社。
- W. バウンドストーン／松浦俊輔訳，2004年，『パラドックス大全：世にも不思議な逆説パズル』，青土社。

- プラトン／藤沢令夫訳, 1994年, 『メノン』, 岩波書店。
- 大野正英, 2011年, 「三方よしの言葉の由来と現代的意義」『三方よし』36。2012年, 「『三方よし』の由来とその現代的意義」, 『日本経営倫理学会誌』, 19。
- 孔子／金谷治訳注, 1963年, 『論語』, 岩波書店。
- 莊子／金谷治訳注, 『莊子 [内篇, 外篇]』, 1975年。
- 老子／蜂屋邦夫訳注, 2008年, 『老子』, 岩波書店。
- 上田院亮ほか, 1999年, 『複雑系を超えて: カオス発見から未来へ』, 筑摩書房。
- 大阪大学ショセキカプロジェクト, 2019年, 『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』, 大阪大学出版会。
- 國分功一郎, 2017年, 『中動態の世界: 意志と責任の考古学』, 医学書院。
- 清水幾太郎, 1970年, 「コンとスペンサー」, 『世界の名著 36 コント スペンサー』, 中央公論社, 5~46頁。
- 田中美智太郎, 1976 (1941)年, 『ソフィスト』, 講談社。
- 西田幾太郎著／上田閑照監修／大橋良介・野家啓一編集, 1998年, 『西田哲学選集 第1巻』燈影舎。
- 橋本陽介, 2017年, 『物語論: 基礎と応用』, 講談社。
- 長谷川博, 1996年, 「マーケティング・チャネルパワー研究の周辺」『経営論集』, 11 (1)。
- 長谷川博, 2009年, 「家電流通の進化: 第1期・過渡期・第2期」『千葉商大論叢』, 47 (1), 65~91頁。
- 長谷川博, 2013年, 「社会交変換論Ⅱ: [超]組織個体記述の進化論, システム論, そして生態学へ」, 『千葉商大論叢』, 51 (1), 41~61頁。
- 長谷川博, 2014年, 「社会交変換論Ⅲ: [超]組織個体記述への「認識-方法」／「形式-内容」連関 (1)」, 『千葉商大論叢』, 52 (1), 17~33頁。
- 長谷川博, 2017年, 「社会交変換論Ⅴ: 間主体性行為ゾーン」, 『千葉商大論叢』, 54 (2), 93~109頁。
- 長谷川博, 2019年, 「社会交変換論Ⅵ: 取引原論へ〈未完〉を考え進めて」, 『千葉商大論叢』, 57 (2), 23~51頁。
- 長谷川博, 2020年 a, 「社会交変換論Ⅶ: マーケティング・アズ・コンステレーションの焦点」, 『千葉商大論叢』, 57 (3), 45~69頁。
- 長谷川博, 2020年 b, 「社会交変換論Ⅷ: 幹マーケティング展望」, 『千葉商大論叢』, 58 (2), 95~121頁。
- 長谷川博, 2021年予定, 「社会交変換論Ⅸ: マーケティングの〈現代〉化 (仮題)」, 『千葉商大論叢』。
- 長谷川博・斉藤保昭・野木村忠度, 2021年, 『流通・マーケティングの基礎』, 成文堂。
- 森嶋通夫, 2004年, 『なぜ日本は行き詰ったか』, 岩波書店。
- 森嶋通夫, 2010年, 『なぜ日本は沈没するのか』, 岩波書店。
- 安富歩, 2013年, 『合理的な神秘主義: 生きるための思想史』, 青灯社。

(2021.1.16 受稿, 2021.2.27 受理)